

林となつて靈異を示す話

『魏書』には木が生じて林となる話が散見してゐる。(1)太祖道武帝は建國三十四年七月七日、參合陂に生れたがそのえなを埋めた故に、明年榆を生じ、つひに林になつたと卷二の太祖紀に見える。(2)林になつたとは書いてないが、卷一序紀には昭皇帝がたまたま蠱に中り、吐いたところに榆の樹を生じた、元來、參合陂には榆がなかつたので、世人がこれを異とし、いまに至るまで記し傳へてゐるとある。參合陂晋北のある榆の樹、榆の林について、かうした因縁話があつたことは、樹や林を靈視した托跋人の態度を反映してゐる。(3)道武帝の元年には昭成帝、すなはち什翼犍を雲中の金陵に葬つたが、ひつぎをつくつた際のこげらがごとく芽生えて林となつたとある、卷二太祖紀 林になつたものが漠然と偉大なる人物のえなとか、嘔吐物といつたやうな身體の一部分でないことが、この第三話とつぎの第四話との特色であつて、それはいづれももと木であつたもの、しかも生木でないものが、ある靈異を示して、芽を出し林となることをいつてゐるのである。こゝに一種の神意うらなひの意をふくんでゐると思ふ。(4)卷一〇八の禮儀志につきの話がある、大同を去る四千餘里、烏洛侯國(興安嶺山中)に魏の祖先がゐて、石を鑿して石室の祖廟を作つた。太延元年、中書侍郎李徹を遣してこれを奉祭せしめ、天地に配して皇祖先妣を祭つた。ところが徹等の祭にあたつて、樺の木を斬つて立て、牲をかけて還つたがその後、立てた樺の木が生長して林になつたといふ。土民ますます神奉し、みな魏國の奉誠が靈祇に通じたしとしてゐる。これは『山海經』に出て來る夸父の杖が、陶林になつたといふ話と全く同じであつて、林を神靈視する態度のほかには、神意をうかゞはうとするうらなひ的要素が多分にある。立木して牲をかけたことは正にシャーマンの猪竿の儀を思はず。(みづの・せいち)